

YAMAKADO NEWSLETTER

NO.145

2011/12/15

山門水源の森を次の
世代に引き継ぐ会

総見山

守護岩



除伐地の林床整備をする会員の前方に広がる「守護岩」から「総見山」の稜線（11/12/14）

かつては 15 ～ 20 年の周期で伐採され森林更新が行われていた森も、1960 年代以降放置されてきた。その結果枯死木や倒木に加えソヨゴなどの常緑樹が増加し、林床の草本類は目だって少なくなり本来の二次林の生物多様性が失われてきました。その森を何とか更新するため一部を試験的に除伐しその推移を観察することにしました。除伐した中で最も太い樹木は、コナラでその直径は 30 cm。伐採後年輪を数えると 68。かつての周期的な伐採後には、萌芽更新が容易であったはずですが、ここまで古くなると萌芽は望めないかも知れません。



年輪68のコナラ(11/11/27)

樹齢 68 年ということになると、当地での炭焼きが 1960 年代まで行われていたことと附合しないことになりますが、これは原木伐採を択抜にした結果と考えられます。当時の伐採は、チェーンソーではなく鋸です。さらに太い原木は、幾つかに斧で割らなければなりません。そうすると能率が悪くなります。従って太すぎるものは残したというわけです。それを確かめる1つの方法は、アカガシ林（炭の原木に最適）で太さを観察すると揃っていることが分かります。除伐地の東側の伐採していない部分で観察してもそのことが理解できます。さてこの除伐地は今後どのように植生が回復してゆくか、食害はどうか、外来種の進入等はどうか等々調査を定期的実施してゆく予定です。

会員各位でこんな調査を行ってみたいという方は、事務局まで連絡下さい。調査項目の調整と担当者を決めたいと思います。その結果が滋賀県南部から京都市東部に広がっているナラ枯れを考えると、この除伐の推移を観察することで、今後の森林管理の方法を考える資料の1つにもなるのではないかとと思われる。また除伐域の東側には未伐採部が広がっており両者を比較対象しながら推移を観察するのにも好都合です。



観察コース

11月は1200名を超える訪問者

紅葉は全国的に冴えないと言われていたものの、山門水源の森には時雨が多かったにもかかわらず 1200 名を超す来訪者で賑わいました。



守護岩周辺で昼食の訪問者(11/17)

Phot: ITO



四季の森のナメコに大歓声(11/28)

Phot: ITO



四季の森の紅葉を愛でる(11/23)



時雨にも笑顔が漏れる(11/24)

時雨で鮮やかさを増す紅葉・滴に光るミヤマウメモドキ・大量落下したブナの実の味・芳香を漂わすタカノツメの落葉・林内を明るく照らすシロモジの紅葉・あちこちに発生するナメコの群生に歓声と笑みが絶えませんでした。ガイド担当者の丁寧な解説に帰宅後感激

の e-mail やはがきも多く寄せられました。別のシーズンにも是非訪れたいとの声も多く聞かれました。これほど多くの来訪者でしたが、無事故で今シーズンが終えられたことが何よりでした。

南部湿原20mボーリングコア採取

念願だった湿原の基盤（岩盤）までのボーリング調査を 11 月 14 日～18 日まで行い、19.4m で基盤の花崗岩に達しました。

このボーリング調査に必要な経費は、国際ソロプチミスト リジョナルプロジェクトから頂いた助成金を使わせて貰いました。詳細な分析は琵琶湖博物館の協力を得て 12 月 6 日から層序の記載を開始し、今後植物化石・花粉分析・珪藻分析・年代測定などを実施します。



琵琶湖博物館で分析コアの取り出し(12/06)



は、大陸時代の河川が運搬してきた礫である可能性が高いのですが、今後周辺の地層調査を行って解明したいと思います。更にその上には、断層で破碎されたとされる厚い地層が見られます。以前から湿原の形成には断層活動が関与していることは言われてきましたが、その活動が何時なのかは未だ解明されていません。表面から 4.7m 前後に始良火山灰層（約 29,000 年前）が確認出来ましたが、これはこれまでに確認されていた 6m より浅くなっています。これは火山灰の堆積した元の地形がそうだったのか、後の断層の活動が影響しているのかは現段階では断定できません。左のコアは、研修室に保管しています。